

「地図豆」の地図を広げて街歩き

## 117-1 田端文士村を訪ねる (6.0km)

### 【道順】

JR 巢鴨駅→六義園正門→六義園→(ここまで地図に無し) JR 駒込駅→駒込東公園→アザレア通り→田端銀座商店街→大龍寺・正岡子規墓→室生犀星旧居跡→田端文士村記念館 → JR 田端駅→与楽寺坂→幽霊坂→与楽寺→向陵稻荷坂→ひぐらし坂→JR 西日暮里駅 :

### ルートマップ



### 【おまけ】

がらんす : ハンバーグシチュー、ビーフシチュー、ハヤシライスのお店。

電話番号 03-5814-8615

住所 〒114-0014 東京都北区田端 1-15-16 JR 京浜東北線田端駅南口 徒歩 5 分

## 地図豆知識：東京都内の文士村

### ・馬込文士村：

大正末期から昭和初期に、東京の馬込から山王にかけての一带には、多くの文士、芸術家が住んでいて、互いの家を行き来し、交流を深めていた。当時の馬込は武蔵野の面影を色濃く残し、静かな田園風景が広がっていたらしい。そして、この辺りを「馬込文士村」と呼ぶようになった。

都市化が進んだ今では、住宅密集地ながら緑もやや多く閑静な街並である。起伏に富んだ小道は、かつて文士達が歩いた散歩道である。その文士たちの住んでいた場所には、モニュメントが置かれている。

この辺りに住居を構えた主な文人たち。

石坂洋次郎、宇野千代、尾崎士郎、川端康成、川端龍子、北原白秋、倉田百三、小林古径、佐多稲子、佐藤惣之助、子母沢寛、高見順、竹村俊郎、日夏耿之介、広津柳浪、広津和郎、藤浦洸、三島由紀夫、三好達治、室生犀星、山本周五郎、山本有三、吉屋信子、和辻哲郎など

### ・田端文士村：

田端は、明治の中頃、雑木林や田畑の広がる閑静な農村であったが、上野に東京美術学校（現、東京芸大）が開校されると、明治33年に小杉放庵（画家）、そののち板谷波山（陶芸家）、吉田三郎（彫塑家）、香取秀真（鋳金家）、山本鼎（画家・版画家）といった若い芸術家が住むようになり、そうした画家を中心に“ポプラ倶楽部”という社交の場も作られ、まさに芸術家村となった。

そこへ大正3年以降、芥川龍之介、室生犀星、萩原朔太郎、菊池寛、堀辰雄、佐多稲子らも田端に集まり、大正末から昭和にかけての田端は文士村としての一面を持つようになった。

### ・杉並（文士村）

杉並区の阿佐ヶ谷のあたりは、かつて数多くの著名な文士が活動していた。

大正12年の関東大震災以後、東京西部の新興住宅地となった阿佐ヶ谷・荻窪界限には、井伏鱒二、青柳瑞穂、伊藤整など多くの文士が移り住み、これら文士は、戦前から戦後にかけて数々の文芸誌を刊行した。そして「阿佐ヶ谷会」という交遊の場を設け、たがいに影響し合いながら文学への情熱を燃やし、独自の創作活動を展開した。

「阿佐ヶ谷会」のメンバーとなったのは、井伏鱒二、青柳瑞穂、太宰治、伊藤整、臼井吉見、中野好夫、火野葦平、亀井勝一郎、河盛好蔵、三好達治などである。

### ・落合文士村



**大龍寺・正岡子規墓**：大龍寺には、正岡子規や板谷波山墓がある静かな寺に葬って欲しいという。正岡子規の日頃の希望に沿って、弟子達が探したのが、武蔵野台地の端にあり、林に囲まれた大龍寺だったという。

**室生犀星旧居跡**：室生犀星旧居跡には、この地に住まいした文人を紹介する地図があるだけ。

**田端文士村記念館**：かつて、この地に住まいした芥川龍之介、小杉放庵、室生犀星、板谷波山といった文人を紹介する田端文士村記念館。

**JR 田端駅**：大昔の海成段丘の上から見下ろした、その海岸縁にあるのが JR 田端駅。

**与楽寺坂**：坂の名は、坂下にある与楽寺に由来している、JR 田端駅方向から与楽寺へ抜ける坂道。

**幽霊坂**：与楽寺へ下るもう一つの坂、幽霊坂は擁壁に囲まれている。

**与楽寺**：賊除（ぞくよけ）地蔵伝説が残り、本尊の地蔵菩薩は、賊除地蔵と呼ばれている。ある夜、盗賊が与楽寺に押し入ろうとしたが、どこからともなく、多数の僧侶が出て来て盗賊の侵入を防ぎ、遂にこれを追い返した。翌朝、本尊の地蔵菩薩の足に、泥のついているのが発見され、地蔵菩薩が僧侶となって盗賊を追い出したのだと信じられるようになり、これより本尊の地蔵菩薩は、賊除地蔵と称されるようになったという。

**向陵稲荷坂**：右手崖の縁に向陵稲荷があることから呼ばれている。

**ひぐらし坂**：ごく最近、ひぐらし坂と呼ばれるようになった。江戸時代に風光明媚な地であることから「日暮里」という字が当てられ、「ひぐらしの里」とも呼ばれるようになった。

**JR 西日暮里駅**